英語

生徒が世界に目を向け、自分で考える場を設けるため、「英語で学ぶ」授業に転換

愛知県・私立
名古屋経済大学市邨（いちむら）中学校・高校
三原美樹 みはら・みき
同校に赴任して 19 年目。英語科。

学校概要
◎設立 1907（明治 40）年　◎形態 全日制／普通科／共学
◎生徒数 1学年約 430 人
◎2024 年度卒業生進路実績　国公立大は、帯広畜産大、筑波大、静岡大、愛知教育大、愛知県立大、叡啓大に7人が合格。私立大は、青山学院大、駒澤大、法政大、立教大、名古屋経済大、南山大、名城大、同志社大、立命館大などに延べ 380 人が合格。

2017 年 4 月号に登場

2017 年 4 月号に掲載した三原先生の記事は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article06169/ または下記の2次元コードからアクセスしてください。

私の授業、こう変わりました

本校は以前から、生徒の英語の運用力を高めるために、GDM（Graded Direct Method ＊）をベースとした授業を行っています。私との英語によるやり取りを通して、生徒は自分の言葉として英語を使う力を着実に身につけているという手応えがありました。ただ、エッセーなどの自由度の高い課題になると、生徒の手が止まりがちでした。その理由は、英語力というより、言語能力や思考力などが十分に育っていないからではないかと考えました。そこで、生徒が目的意識を持って英語を使いながら、言語能力や思考力などを磨いていく活動を授業に取り入れました。英語に関する知識・技能を身につけながら、世界の様々なことについて知り、自分の考えを深めていく課題を出し、その成果を、英語での発表やプレゼンテーション、英語のエッセーの作成などを通して、自分の言葉で表現する力を育むことを目指しています。

＊ 段階的直接法と言われる、母語を使わず、易しい表現から段階的にレベルを高めていく外国語の教授法。

授業リポート

本時の概要

［対象］ 1年生 ［教科・科目］ 英語・英語コミュニケーションⅠ
［単元］『Friedrich “Benches”』by Hans Peter Richter
［単元目標］ 英語を駆使して思いを伝えられるようになり、高次思考力を身につける。社会につながる行動に結びつけ、人間的に成長する。
［授業時数］ 全 12 時間のうちの 7 ・ 8 時間目
［本時の目標］ 英語劇による発表を通して、物語から考えたことを表現する。

DOWN LOAD 単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/ または右の2次元コードからアクセスしてください。

ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介！

1 本時のねらいを説明

5分間

三原先生は授業の冒頭、“What’s the purpose of learning English?” と生徒に問いかけた。生徒からは、「いろいろな国の文化を学ぶ」「興味・関心を広げる」といった声が上がった。続けて、本時に行う英語劇による発表の目的を考えさせた上で、“To know the world. To have your own opinion. To create, express, share it with others.” と、活動の方向性を示した。

継続している点 授業は、できるだけ英語を使って生徒と対話をすることで、生徒が英語で考え、表現する場になるよう心がけています。

改善点 一方で、「英語を学ぶ」授業から「英語で学ぶ」授業へと大きく転換しました。本単元では、英語劇の創作を取り入れ、歴史や宗教、差別といったテーマについて深く考え、自分の意見を表現する過程を通して、英語力とともに、言語能力や思考力などを育むことを目標としました。

2 5つのグループが英語劇を披露

80分間

生徒が前時までの 3 時間をかけて準備してきた、短編小説『フリードリヒ “ベンチ”』（あらすじは **P.30 図 1** を参照）を題材に創作した英語劇を、 5 つのグループが順番に披露した。 1 年後に 2 人が再会した物語の劇や、ユダヤ人迫害の歴史的背景を解説する劇、特定の血液型が差別される架空社会を描いた劇など、どれも生徒のオリジナリティーにあふれていた。演劇後、生徒はルーブリックに沿って各グループの評価を端末に入力した。

改善点 生徒が主体となり、他者と協働しながら、答えが 1 つではない課題に取り組む活動としています。本単元では、台本を書く際に、物語の続きでもよいし、歴史や宗教をテーマにしてもよいと、生徒に話しました。

3 活動の振り返り

10分間

全グループが披露した後、生徒は椅子を円形に並べて座った。三原先生は、「劇を創作して、また、演じてみてどのようなことを感じたか、気づきや学びを出し合おう」と呼びかけた。生徒からは、「どうすれば差別が根絶するかを考えさせられた」「現代のイスラエルとパレスチナの問題について学びたいと思った」といった声が上がった。

4 保護者、教育関係者からの講評

5分間

本時の授業には、保護者や教育関係者が招かれていた。保護者は、「高校に入学してまだ 2 か月だが、立派に英語劇をやっていたので驚いた」などと感想を述べた。教育関係者は、「英語の技能を学びながら、社会で生きる力が育っていると感じた」と講評した。

発問・課題設定の観点

生徒の心を揺さぶる題材を選び、深い思考につなげる

英語の運用力にとどまらず、英語で自分の意見を伝えられる力を育みたいと考え、英語を使う活動が中心の授業に転換しました（**コラム参照**）。本単元は、生徒が短編小説『フリードリヒ〝ベンチ〟』（**図1**）を英文で読み、感じたことや考えたことを基に、グループで英語劇を創り、披露する活動としました（**図2**）。本書を題材にしたのは、歴史や宗教、差別などが絡み合う、心を揺さぶる物語であり、生徒に深い思考を促すと考えたからです。グローバル社会で活躍するために必要な資質・能力を育む「エクスプローラーコース」を担当するようになってからは、生徒が社会に広く目を向けて様々なことを考えられる題材を選ぶようにしています。

創作活動が充実するよう、単語の確認などは予習とし、1～3時間目は、音読や内容確認、単語テストなどを通して、物語の理解をじっくりと深めていきました。

4～6時間目は、グループで英語劇の創作と練習を行う時間としました。私は、「何でもよいからアイデアを出そう」などと声をかけ、生徒がグループ内で安心して発言できる環境づくりに努めました。そうして生徒一人ひとりが自分らしさを発揮する中で、アイデンティティーを見つけることを期待しています。

授業時間内に準備が終わらなかったグループは放課後、自主的に集まり、セリフの英文を手直ししたり、練習の姿を動画で撮影してチェックしたりするなど、熱心に取り組んでいました。主体的に活動した成果は本番の英語劇に表れ、どのグループの劇も創造性にあふれていました。

本単元での学びを社会につなげる実践として、本書から学んだことを発信する「放課後 Café イベント」を校内で実施します。次時は、そのアイデア出しや運営に関する話し合いを行います。そして単元の最後には、本単元の活動を通して気づいたことや考えたことをまとめるエッセーライティングに取り組み、言語能力や思考力の育成につなげます。

図1 『Friedrich “Benches”』あらすじ

ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害を背景とした短編小説。ユダヤ人の少年フリードリヒは、ドイツ人の少女ヘルガと親しくなる。ある日、公園でフリードリヒが「ユダヤ人専用」と書かれたベンチにしか座れないことを知ったヘルガは、次に会う時はベンチのない森へ行こうと提案する。しかし、フリードリヒは、ユダヤ人の自分と会うことでヘルガに危害が及ぶことを恐れ、約束の場所に行かなかった。

図2 「Friedrich “Benches”」単元構成

時数	育成したい力	内容
1～3	低次思考力、高次思考力	**物語の内容読解** • 読解テスト、単語テスト、音読テスト • 物語からオープンクエスチョン • 関連情報リサーチ＆共有、意見
4～6	高次思考力	**英語劇の創作・練習** • 少女ヘルガの視点からこの物語を書く、物語の続きを書く、互いへの手紙を想像して書く　など、自由に創造
7・8	高次思考力	**英語劇を披露**
9・10	高次思考力、社会につなげる行動を起こす	**「放課後 Café イベント」の開催に向けて** • イベントで伝えたいことをチラシにしてクラスで共有（映画上映会、講演会、ブッククラブ、ワークショップなど） • クラスでイベント内容を決める • 日時を調整し、イベントを実施
11・12	高次思考力	**ライティング** • 5パラグラフエッセー（型の導入） • 本単元での学びを英文でまとめる

※図1、図2ともに学校資料を基に編集部で作成。

学習評価の工夫

振り返りを毎授業書くことで、次時の目標を持たせる

本校は定期考査を実施していません。授業内で行うテストや活動などを評価材料としています。

本単元では単語テストや音読、文章読解などを評価材料にして「知識・技能」を評価します。「思考・判断・表現」は自由記述による内容理解テスト、英語劇のアイデア出しや台本づくり、発表、単元末のエッセーライティングなど、多様な活動を総合的に評価します。発表やエッセーライティングなどではルーブリックを提示し、形成的評価として相互評価を行いました。

「主体的に学習に取り組む態度」は、英語劇への取り組みの様子や振り返りシートの記述などを基に評価します。振り返りシートは、毎授業

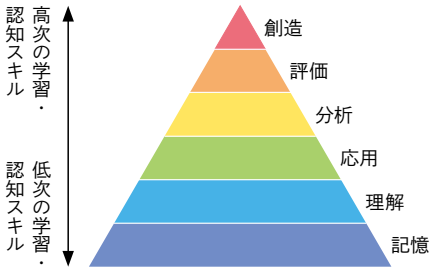
「高次思考力」を段階的に育てる単元デザイン

英語の学習を通して、自分の視野を広げながら、思考を深め、自分の意見を持ち、さらには利他的なマインドを持って行動できる生徒になってほしい。そうした思いから、国際バカロレア（IB）の研修などに参加して、授業づくりに関して多く学んできました。そこで得た視点は、現在の授業実践に大いに生かされています。

その１つが、「ブルームのタキソノミー」と呼ばれる教育目標の分類法です（**右図**）。記憶・理解・応用といった基礎的な思考（低次思考）から、分析・評価・創造といったより高度な思考（高次思考）へと深めるための枠組みを基に、単元内のどの授業でどのレベルの思考力を育てるかを意識して単元構成を練っています。例えば、語彙や文法の習得をした後には、自分の考えを英語で表現したり、他者の意見を基に議論したり、グループで協働して創作に取り組んだりする活動を取り入れています。さらに、英語の授業での学びが社会的な行動につながるよう、より高次の思考を引き出す工夫をしています。本単元では、素材文の読解や英語劇の創作を通じて考えたことを発信する放課後のイベントを実施します。

生徒が英語を使って考え、表現し、行動する経験を積み重ねていくことで、英語の運用力に加え、言語能力や思考力も着実に育っていくと感じています。

■ブルームのタキソノミー



※学校資料に掲載されたフロリダ大学 CITT（Center for Instructional Technology and Training）の Bloom's Taxonomy-Cognitive Domain（2001）を基に編集部で作成。

後に「前時の設定課題の達成度」「授業参加度」などを自己評価し、自分ができたことや反省を自由に書くものです。本時の成果や課題を次時に生かすことで、学びに連続性を持たせることをねらいとしています。

本校全体の取り組みとして、生徒はいつでも、自分のタブレット端末などから本校の評価システムにアクセスし、すべての評価項目について自分の評価を確認できます。それが学習姿勢や取り組みを見直すきっかけにもなっています。

成果と展望

英語を使って学ぶ意識を持ち、世界に視野を広げる生徒たち

以上のような授業改善を通じて、多くの生徒の英語学習の目標が、「英語を使えるようになる」ことから、「世界で起きている様々な事象を英語を通じて学び、自分の意見を持つ」ことに変わってきています。2024年度の卒業生は3年間、活動主体の授業を受けたことで視野が世界へと大きく広がり、それが進路選択に結びついたケースが多く見られました。

活動に積極的に取り組み、自分で学びを生み出そうとする生徒も出てきています。例えば、本時を見学した2年生から、「自分たちも英語劇を創って披露したい」といった声が上がりました。

本単元で取り上げたような難しい題材について他者に分かりやすく伝えたり、自分の考えを論理的に表現したりするためには、高度な英語力が求められます。そのため、授業外でもグループで学び合ったり、外国人教師に質問したりする生徒が増え、英語力も着実に伸びています。

私の今後の課題はテクノロジーの活用です。生成AIや翻訳機能などが進化する中、英語学習のあり方が大きく変化しつつあると感じています。そうした技術をどのように活用すれば、生徒が英語をより使いこなす上での支援となるのか、模索していこうと思っています。